巻頭エッセイ

Opening Essay

英語落語で世界を笑わす！

大島希巳江　Oshima Kimie

英語落語をプロデュースするようになってから，8年がたつ。1997年のアメリカ公演をかわ切りに，毎年様々な国で公演活動を行ってきた。古典落語の創作翻訳をし，現役の落語家に丸暗記してもらい，海外向けに演じるための指導をする。反対にこちらは落語家に落語の技術を習う。そうして出来上がった英語落語をひっさげて，私たちは世界を笑わせて回っている。このような活動を始めた理由は，笑わない，ユーモアがない，英語が下手，という定着した日本人のステレオタイプをなんとかくつがえしたい，という思いからである。そして笑いを通して日本文化を紹介していきたい，と考えている。

笑いには不思議な力がある。異文化を好意的に受け入れさせる，パワーがあるのだ。だからどの国の観客も英語落語を観ると，彼らにとって異文化である日本文化を，笑いながら受け入れてしまう。こんなことがあった。「時うどん」という落語で，落語家が勢いよく大きな音をたててうどんをすすり，だし汁をズルズル飲むという場面がある。通常，欧米文化ではこれは許しがたいテーブルマナーとされている。顔をしかめて，嫌悪感をあらわにするかもしれない。しかし，英語落語の観客の反応は違った。「あんなことができるなら，是非日本に行ってみたい。日本に行って思い切り音をたてて noodles を食べてみたい！」とアンケート用紙に書いた観客が多かった。日本はなんと野蛮な国だろう，と思わせるのではなく，行ってみたいと感じさせることができたのである。落語の底力と，ユーモアのなせる技である。

落語の笑いが外国人にわかるのか，という質問をよく受ける。答えは Yes. だ。観客はひっくり返って大笑いし，日本と違って客層が若いだけに，盛り上がり方も大変なもの。落語は，長い歴史を持っている。逆にいえば数百年もの間，すたれずにどの時代の人たちも笑わせてきたのである。江戸時代の日本人は現代の日本人と比べれば，それはもう外国人と日本人のように異文化の持ち主である。落語は普遍的なユーモアを芯としているストーリーが多いため，どこでも誰にでもうけるのである。

そんなにうけるほど落語家たちの英語はうまいのか，というとそうではない。彼らの英語はベタベタの日本語発音である。しかし，ひとつの会場に集まった800人以上の英語ネイティブの観客を前に，全員を大爆笑させることができるほど，彼らの英語は見事に通じているのだ。そしてその日本語発音の英語は，私たち日本人のアイデンティティなのではないか。英語にしても文化にしても，それぞれが異なることは当たり前なのである。

異文化理解において重要な点は，異なる部分を指摘することではなく，共通点を見出すことである。それがコミュニケーションにつながり，異なる部分さえも理解しあえる関係を作り上げる。笑うという行為は世界共通である。一緒に笑い合うという共通点を見出すことによって，私たちはよりよいコミュニケーションをとることができるのである。

おおしま　きみえ
東京都出身。コロラド州立大学卒，教育学（社会言語学）博士。英語落語プロデューサー，文京学院大学外国語学部講師。専門は社会言語学，異文化コミュニケーション，ユーモア学。NHK 国際放送局「Hello From Tokyo」キャスター。『世界を笑わそ！ Rakugo in English』（研究社）など著書多数。